

レクチャー3

時間の本性とは？

植村恒一郎



なぜ「時間の流れ」は不思議なのか？

時計の秒針を見詰めていると、その動きが時間の流れの速さを示しているかのように思えてしまう。なぜなら、秒針の動きがそれより速くても遅くても、それはその時計が進んだり遅れたりするということを意味しているから、ところが時計には秒針のほかに長針も短針もある。どの針の動く速さが時間の流れる速さと一致しているのだろうか？

仮にどれか1本の速さが時間が流れる速さとぴったり一致すれば、その針は他の2本に比べて特権的な地位をもつことになるが、明らかにそのようなことはない。では時計の針の運動と時間の関係はどうなっているのだろうか。

我々の生きる世界には無数の運動と変化があるので、それと一緒に「時間の流れ」もあると漠然と考えてしまうが、それは正しくない。時計が計るのは他の運動の速さであり、時間の流れる速さではない。具体的には、人が100m歩く「間に」自動車は500m走るから自動車は人よりも5倍「速い」というように比較ができる。ここで重要なことは、人がこれだけ動く「間に」というこの「間に」という捉え方であり、これがあるからこそ人と自動車との速さの違いを定量的に捉えることができる。針がここからここまで動く「間に」という基準量を時計は提出することができるから、あらゆる運動の速さが測定されることができるのだ。基準運動であるということが時計の本性である。時計の3本の針は、秒針が60回まわる「間に」長い針は1回転するというように、比率としての数をそれ自身が生み出す関係にある。だからここに、60分という一定の数で表される「量としての時間」が成立する。時計によって「量としての時間」が成立すれば、すべての運動はその「時間の中で」行われることになり、量としての時間は直線で表される。これが物理学で t という記号で呼ばれ、1本の直線で表現される時間である。物理学の時間は直線で表されているのだから、厳密に言えばその時間自身は「流れない」。つまり物理学の時間は量のみをもつ時間なのである。

にもかかわらず、物理学の時間は、我々が理解する時間という現象のすべてを

本当は流れないのですよ、時間の流れというのは錯覚なのです」と言われても、それで納得するわけにはいかない。それは、我々には自分の「体験の流れ」というものがあるからである。この「体験の流れ」こそ、「時間の流れ」という我々の抜き難い直観の根底にあるものである。たとえば朝目を覚ますと、自分の部屋の一部分が光景として広がっているが、自分が体を動かさずにつれて、この見えている光景は次々に移り変わる。ここには、現在の光景が過ぎ去るという光景の交替があり、未来・現在・過去という時間様相の基本形がすでに存在している。このような「光景の流れ」あるいは「体験の流れ」には、その「流れる速さ」を言うことができない。たとえば私が自分の首を振るとすれば、近くのものには30センチの距離を流れるが、夜空の星であれば何万光年も離れた2つの星の距離が光景として流れる。そこに光景の流れの絶対的な速さを言うことはできない。その理由は、たとえば視覚の光景は閉じた全体を成しており、自分に見えている光景をさらに別のもっと大きな視覚の中に置くということではできないからである。

ここに、「時間の流れ」あるいは「動く今」という、我々の時間経験の一番基礎になるものがあることは明らかである。では、このような「体験の流れ」としての「動く今」は、時計の時間が作り出す「量としての時間」あるいは物理学で直線として表現される「流れない時間」と、どのように関係しているのだろうか。

「動く今」の謎

「私の体験」の流れは誰にでもよく分かる。「私の今」が移り変わる。身体の動き、知覚の変化、音楽や会話を聞く…。そして、他の人にも自分と同様の「体験の流れ」があり、「それぞれの人にとっての今」の光景とその移り変わりがあるだろうと想像している。だが、この各人の「今」はばらばらではなく、それが一斉に揃って、いわば並んで行進するようにも我々は感じている。というのも、各人の「今」の光景はそれぞれ違っているとしてみても、皆が一斉に「1つの時計」（たとえば太陽の位置）を同時に見ることが可能だからである。このように我々は、「私の今」の動きは私だけのものではなく、全員に共通する「今の流れ」だと思っているからこそ、安心もしていただける。たとえば、睡眠中の私の「今」の流れは昼間起きて生活しているときの「今」の流れとは違っている。しかし、その間じゅ

う起きていた他の人には「今」がゆっくり流れたはずだと考えるから、自分が寝たことによって、客観的な時間の流れが変わったとは思わない。しかし「すべての人間に共通の今の流れ」という理解には、本当は重大な問題が隠されている。すなわち、「もし人間が一人もいなかったら、すなわち自分を『私』として意識する存在が消えたならば、それでも今は流れるのだろうか」という疑問である。たとえば生命が誕生する以前の地球でも、時計の針が進むように「今」が流れていたのだろうか？あるいは将来人類が減びた後も、しずかに「今」は流れ続けるのであろうか？この問いに簡単にイエスと答えることはできない。なぜなら、「私」がいないところでは「今」という時間そのものが存在しないように思われるからである。そもそも「今」とは、人間である「私」が自分が置かれている状況を意識するところに成り立つ。たとえば私が「今何時だろう」と時刻を確認する場合や、あるいは外で待っている友人に「今すぐ行きます」と返事をする場合などを考えてみよう。そこでは、何らかの意味で「私が置かれた状況」が意識されており、「今」とは必ず「今ここ」の「今」であって、「今ここに私がいる」という確認が「今」という時間にはその意味として含まれている。デカルトの「我思うゆえにあり」も、「今考えているのはこの私以外ではありえない」ということであり、またベルクソンは、「私の現在とは、私の身体を意識することだ」と述べた。つまり、「今」とは、「今ここにいる私」の「この感じ」を抜きには存在しない。とすれば、もし誰も人間がいなかったならば、「今」という時間そのものが存在しないはずである。したがって当然、「今の流れ」も存在しないことになり、「今の流れ」という意味での「時間の流れ」も存在しないことになる。

このように、「今」という時間は、人間が自分を意識するところにしか存在しない。たとえば、生命が生まれていなかったころの地球の姿を、火山が噴火し溶岩が流れ出しているものとして想像するとすれば、それは「もしそこに自分が立ち会ったならば」という仮定のもとに見ているのである。さらに時間を地球誕生以前にまで拡張して、ビッグバン以降の宇宙の膨張の過程にも「今が流れていた」と考えるならば、宇宙の生成をそこにいないはずの「人間の眼で」捉えていることになる。ここに「動く今」と「時間の流れ」のパラドックスの原因がある。「存在するということは、知覚

されることである」と述べたのはバークリだが、時間については実際に我々自身が彼の主張に非常に近いところにいる。すなわち「時間の流れという存在は、人間の意識を前提する限りのものである」ということになる。このことに十分に自覚的でないところに、時間をめぐるさまざまな謎やパラドックスが生まれるのだ。

我々はどうしても、自分の体験として時間が流れるだけでなく、人間の外部にも時間が流れているように考えざるをえない。たとえば歴史の年表は次第に長くなっていき、過去は次第に増えていくものと考えられている。それに対して未来はまったくの空白と考えられており、過去が増えたからそれだけ減るようなものではない。ちょうどお茶を入れる丸い円筒が未来に向かって延びていくように我々は人類の歴史を考えている。この円筒の切り口に当たる円の広がり、**「現在」「今」という時間を表しており、我々は全員この「今」を共有しながら一緒に未来に向けて延びる円筒の端に存在している。**これが「動く今」の人類の歴史バージョンであるが、しかし、この円筒が延びるというモデルは、自分の「動く今」を拡張しただけのものである疑いを禁じえない。本質的に一人一人の「今」は自分だけのもので、「私の今」は私の身体感覚を含む体験だから、原理的にだれもが自分の「私の今」の外部に出ることは出来ない。にもかかわらず我々はそれを外部の世界に投影して、世界それ自身にも「今が動く」と考えざるをえない。自分の死の後世界は普通に続いていくだろうと我々は考えるが、これは他者が生きている世界が存続するという前提があるからである。しかし人類の全員が減びてしまった後、「かつて人類がいた」と過去を想起してくれる「宇宙人」もいないような人類の死においては、「今」を感じる意識そのものが存在しないから、「過去」という存在もそこにはないことになる。とすれば「過去」も存在しないのだから、「かつて人類が宇宙に存在した」という過去の存在もまた遡って消滅するのであり、はじめから人類は存在しなかったという絶対無になってしまう。しかしながら我々はそうは考えないのであり、人類が減びた後も人類の存在を過去にするような「今」が宇宙に存在し、一切の意識する存在がいなくてもかわらず、宇宙には「動く今」という時間が流れるように考えざるをえない。ここに一人の個人の意識を全宇宙の歴史に拡大してしまう、人間の意識のパラドックスがある。